

22

8月2018

【連載】母と私たちの、初めての在宅ケア（最終回）

家族に見守られ、
穏やかに旅立つ ～連載 10文責: がん・バツテン・元気隊 運営委員
大山 薫

全6ページ

眠ったまま逝った母

5月下旬から母の眠っている時間が長くなり、食事もほんの少ししか取れなくなってきました。起き上がって簡易トイレに移ることも難しくなり、紙パンツから紙おむつになりました。数錠の薬を飲むことも辛そうで、なかなか飲み終わりません。水ばかり飲んでいきます。

5月28日の午前中は、訪問看護師さんに、「最後だから一緒に写真撮って」と言い、また、午後にお見舞いに来た80代の親族に、力のない声で、「訪問看護のひらおケアさんが良くしてくれるから、あなたも頼んだ方が良い」「福祉用具ならウェルファーケアさんをお願いしたら良い」と、一生懸命伝えています。

夕方は、往診に来られた二ノ坂院長の顔を見て安心したのか、「サンタクロースが来た」と冗談を言って私達を笑わせてくれます。しかし、容態は良くありません。二ノ坂院長がPCA^{※1}ポンプの処置をされました。

※1 PCAとは…

自己調節鎮痛法という、患者自身が自分の疼痛の程度に応じて鎮痛剤を使用する方法で、静脈・硬膜外投与によって、経口投与より高い鎮痛効果が得られる。

二ノ坂院長から説明を聞き、母は不安そうにしていたのですが、「熊野さんが痛みを感じたら、お父さんに伝えてね。そしたらお父さんがちゃんとスイッチ押してくれるから。お父さん大丈夫よね？」という、二ノ坂院長の問いに、父が力強くうなづく様子を見て、母も安心したようでした。

二ノ坂院長も帰られ、私が、「お母さん、今日はもう疲れたでしょう。安心して寝て良いよ。みんな側にいるからね」と言うと、母は安心して眠ってしまいました。そして、その後一度も目を覚ますことなく、リビングの介護ベッドで眠ったまま、5月31日未明に父や娘夫婦達、孫達に囲まれて穏やかに息を引き取りました。熊野警子、85歳。母が亡くなるまでの経過を書きたいと思います。

意識がない母に、いつも通りのリハビリと訪問看護

5月28日の夜は、私も両親宅に泊まり母の様子を見ていましたが、母は一度も目を覚ましませんでした。翌29日の朝、訪問看護師さんが来られ母に声をかけますが、反応が無いので、にのさかクリニックに連絡し副院長が往診に来られました。いわゆる危篤状態になっているとの説明があり、その事を家族や親族に伝えた方が良いということ、その他の対応などについて詳しく話して下さいました。

午後、いつもの理学療法士さんがリハビリに来られ、「熊野さん、熱計りますよ。脇に体温計挟みますよ。血圧も測りますね。」と声をかけ、いつものように母の体調を看られます。そして、「はい。じゃあ、リハビリ始めますね」と、眠っている母にずっと声をかけながらリハビリをされる姿を見て、胸が熱くなりました。「熊野さんは聞こえていると思います」と、母が好きだと言っていた、にのさかクリニックのデイホスピスで歌う『今日の日はさようなら』を、自分のスマートフォンから流して母に聞かせてくれます。「熊野さん、ユーミンも好きだったでしょう」とユーミンの曲もかけながら、マッサージもしてくれます。

意識が無い母へいつもと同じように接して下さい、看護師さんや理学療法士さんの気持ちがとても嬉しくて、有り難かったです。

訪問看護師さん達からの歌のプレゼント

5月30日、訪問看護師さんが来られ、いつもの様に母の体調を看て紙おむつの交換などをされました。そして、昨日の勤務後に歌って下さったという、訪問看護ステーションの皆さんによる『今日の日はさようなら』をスマートフォンで再生し、母の耳元に当てて聞かせてくれます。

母の担当看護師さんや理学療法士さん、関ってお世話してくれた方々、聞き覚えのある皆さんの声が聞こえてきます。きっと眠っている母にも聞こえていて、感謝していると思います。私達家族も、看護師さんの思いやりに心が温かくなり感謝の気持ちで一杯になりました。

孫たちが母の手を洗う



また、看護師さんは、周りで見守っている孫に母の手を洗ってあげるよう勧めてくれました。『手浴』と言うそうです。

「熊野さん、お孫さんに手を洗ってもらいますよ」と言いながら、孫2人がおばあちゃんに触れる時間を作ってくれました。

孫の感想



病院ではなく、在宅だったので、ずっとおばあちゃんの側で過ごす事が出来ました。また、家族からおばあちゃんの思い出話を聞きながら、最後を看取ることができて良かったです。

家族で母を囲んで語り合う

看護師さんが帰られた後、家族で母を取り囲み、父は母の横に座り手を握りました。母は延命治療、延命措置を望んでいませんでしたので、もし母の容態が急変しても何も出来る事はなく、ただ、母が亡くなる時には側についてあげようという気持ちでした。



母は父に、自分が亡くなる時には手を握っていて欲しいと言ったそうで、父は母の気持ちに応えようとずっと母の側に座り、手を握っていました。

家族の誰かが、いえ、目の前で人が亡くなるという事を体験するのは皆始めてでした。母の呼吸、息づかい、胸の動きを、かたずを飲んで見守りました。

母がもし話せたら、「こんなに皆に見られたら恥ずかしい、緊張するわ」と言って笑わせてくれそうです。皆それぞれに、母の手を握ったり、足をマッサージしたり、話しかけたり、母の好きな曲をかけたり、昔の写真を見ながら思い出話をしたり、母に気持ちを伝えている様でした。

母の呼吸が静かに止まる

5月31日の明け方、父が母の手をしっかりと握り家族も見守る中、母は穏やかな表情で、ゆっくりと呼吸を止めて亡くなりました。母が苦しまず穏やかに亡くなっていく姿は、母が私達家族にしてくれた大きな思いやりだと思います。それは、誰も、「お母さん死なないで」と泣いたりせずに、「お疲れさま。がんばったね、ありがとう」という気持ちで見送る事ができたからです。



みなで「エンゼルケア」を手伝う

母が息を引き取った時間を確認し、にのさかクリニックとひらお訪問看護ステーションに電話をしました。にのさかクリニックから来られた医師が母の死亡を確認し、その後は訪問看護師さんが2名来られ、死後の処置『エンゼルケア』をされました。

ここでも、在宅ケアの素晴らしさを経験することになります。看護師さんと一緒に、父も娘も孫も、みなエンゼルケアを手伝うことができたのです。母の体を拭き、髪の毛を洗ってドライヤーで乾かし、母が着せると言っていたお気に入りの服に着替えさせました。



最後の最後まで、母に精一杯のことをしてあげる事が出来て、家族みなが誇らしい気持ちだったと思います。

在宅での介護は大変な事がたくさんあると思います。でもそれ以上に、介護される側も、介護する側も、見て、話して、触れて、直接何かをしてあげられることが、家族にとって一番嬉しいことなのではないかと思います。

連載・最終回にあたって

大変なこともたくさんあった母の在宅介護ですが、「この大変な事は一生続く訳がない」と思いながら、その時その時を一生懸命にやってきました。

しかし母が亡くなってしまえば、やはりこんなに早く亡くなるなんて、まだまだお世話したかった、と残念な気持ちで一杯です。大変だったと思うより、楽しかった、というのが正直な気持ちです。母の在宅ケアのお陰で、初めての経験や知識も増え、応援してくれる方達との出会いにも恵まれました。そういう気持ちになれたのは、私達家族を支え応援して下さった、にのさかクリニックの皆さん、ひらお訪問看護ステーションの皆さん、そして、その他すべての在宅ケアを応援して下さった皆さんのお陰です。本当に感謝しています。ありがとうございました。

先日、ひらお訪問看護ステーションの皆さんが、母のお参りと、父の様子も見に来てくれました。そして、看護師さんが父に、「熊野さん、在宅でのお世話とても大変だったでしょう。本当にお疲れ様でした。お尋ねしたいのですが、熊野さんはご自分の時には、病院と在宅ケアのどちらを選ばれますか？」と聞かれると、父は即答で「自分も在宅が良か」と答えたので、看護師さんは「そう言ってもらえて、とても嬉しいです」と目を潤ませておられました。そして、「でも、薫さんはまた大変ですね」と言われたので、皆で大笑いしました。

最後に父からの聞き書きです



世の中には、自分の望む最期を迎えられない人、辛さや痛みで苦しんで亡くなる人、一人寂しく亡くなる人、そんな人が大勢いる中で、お母さんが自分の希望である自宅で最後まで過ごし、家族に見守られながら、苦しまずに眠る様に亡くなったことは本当にありがたかったね。

お母さんの穏やかな最後を看取ることが出来たのは、にのさかクリニックや、ひらお訪問看護ステーションのみなさんのお陰やね、お母さんもきっと感謝していると思う。お母さんの分も皆さんにお礼を伝えたいと思う、大変お世話になりました、ありがとうございます。

(おわり)